

日本語クラブから創られる教師像 ——教師志望の動機はどのように現れるのか——

伊牟田 翼

1. はじめに

近年のタイの発展により、低待遇の教師と一般企業で働く会社員とでは、経済待遇の差がますます広がるばかりである。したがって、日本語教師という職は、大学の仕事ですら、民間企業の社員の地位より魅力が薄いと思われている（松井他 1999）。国際交流基金バンコク日本文化センターでの現職教員養成講座なども行われてはいるが、日本語専攻であったという高校教師は需要に足りていないのが現状である。また今後も日本語習得希望者は、中等教育をはじめ、高まってきており、タイ人教師の「量」が問題とされているのである。

一方で、Sheldon は東南アジアでの教員経験を通じて、文化人類学的な視点から、タイでの教師像は社会的に高い地位に当たり、学生だけでなく、多くの人々から尊敬される職業だと述べている。このように考えれば、教師不足の問題は待遇だけに限られるのだろうかという疑問が出てくる。

また藤原（2004）は日本の教員採用に合格した学生を対象にアンケート調査をしたところ、7割の学生が高校または大学時代にクラブ活動に熱心であったと述べている。このことは、タイ人学生のクラブ活動と教師像についての分析に応用して考えられるのではないかな。

なぜ日本語科専攻の学生は教師を職業選択に入れないのか。本当に低待遇ということが理由になっているのか。またクラブの活動と教師への動機とが結びつく可能性はあるのだろうか。

本論では、タイ人日本語学習者が高校教師を志望する動機がクラブ活動を通してどのように現れるのかについて、キングモンクット工科大学日本語科専攻の学生の例から考察したい。

まずはじめに、教師志望の動機と日本語クラブの関係について、先行研究から述べたい。次に、キングモンクット工科大学日本語科専攻の学生へのアンケート結果について説明する。そして最後に著者からの提言を行いたい。

1.1 クラブ活動が生み出す教師志望動機の可能性

2008年現在、タイ国のタイ人日本語教師は大学でも8千バーツであるのに対し、日本企業での通訳者の初任給はおおよそ1万8千バーツからである。大企業になれば、初任給が2万～3万バーツ、または初めての研修が日本で行われたりするところもあり、日本語を専攻に学ぶ学生にとっては勉学の大きなインセンティブになっていることは事実である。

しかし Jarernvongrayab（2006）はタイのある国立大学で、クラブ活動に参加している学生への調査から、男子学生よりも女子学生の方が明確な動機が存在しているとした。これは女子学生が

多い日本語専攻でも、なんらかの強い動機を持ってクラブ活動に参加していると考えることができる。つまり教師の待遇については国の公務員に対する法改正が必要になってくるが、クラブ活動を通じて教師志望の動機が現れるならば、待遇以外にも効果的な対策が見えてくるのではないだろうか。

2. 日本語クラブの活動概要

キングモンクット工科大学は1960年に「ノンタブリー電気通信訓練センター」として設立され当初より JICA の支援を受け、1985年には総合大学に昇格した。現在では毎年多くの優秀なエンジニアを輩出するまでになった。日本語科専攻は1987年に産業教育学部の社会言語科の中に設立された。同学科には英語科もあり、日本語科の学生は副専攻として英語も学んでいる。

日本語科の設立と同時に、日本語クラブも当時から現在まで続けられている。クラブの目的は、日本語を学ぶ意思のある他学部の学生のために日本語を教えること、また文化祭などの行事で日本文化を日本語科専攻の学生以外にも披露することである。クラブには日本語専攻の学生が全員所属しており、全体のカリキュラムは4年生が作る。担当学年は曜日ごとに決まっており、月曜日は4年生、火曜日は2年生、水曜日は3年生、木曜日は1年生となっている。学年ごとにグループが分かれており、今週はAグループといった形で毎週変わる。学ぶ学生は工学部、理学部、英語科の学生の順で多く、いずれも卒業後に日系企業で働くことを見据えて受講しているようだ。中には日本語レベルは上級までならずとも、他学部の専攻での実績と基礎的な日本語力が認められ、奨学金をもらい、日本に留学する学生もいる。

日本語クラブでは、新学期とともに新しいクラスが始まり、時間帯は授業後の4時から6時までである。中級レベルでの教え方はほぼプライベートになっているが、新しいクラスでは、グループのリーダーが先生役として黒板を使いながら、全体での指導を行うことが多い。しかし、受講する学生は自主的参加であるため、中には自分の専門との両立ができずに来なくなってしまう人もいる。その一方で、日本語クラブの先生として、「教え方がうまい」「熱心に教えてくれる」などと評判の日本語科の学生から教えを受ける他学部の学生は、学期終了時まで続けて通い、中には日本語科専攻の学生と同じレベルの日本語力を身につける学生もいる。

日本語科での成績が上位ではなくとも、自分がなかなか習得できなかった経験を生かし、自分でフラッシュカードやひらがな・カタカナカードなども作成したりなど工夫している学生もいる。またそのような学生は、人に教えることで自信を持ち、日本語を勉強することへの意識が高まる期待も十分にある。多くの学生は日本語クラブで教えた経験から、他学部の学生に負けまいと刺激され、自分の日本語学習にも励んでいるようにも見受けられる。

3. 日本語科の学生へのアンケート調査から

キングモンクット工科大学

日本語専攻の4年生（35人：有効34人）と1年生（47人：有効44人）に対し、アンケート調査を行った。アンケートは、教師志望があるかないかについて、卒業前の4年生と入学後前期と後期を終えた1年生を対象とし、比較することを目的とした。

まず「今まで一度でも教師になりたいと思ったことがあ

るか。」という質問では、「全くない」の回答者率はほぼ同じ（1年生36%、4年生共に35%）。「一度はあるが、今は思わない」については1年生の方が若干多かった（1年生43%、4年生38%）。教師志望が「ある」では4年生の方が高くなっている（1年生20%、4年生29%）。

3.1 高校時代のクラブ活動との関係

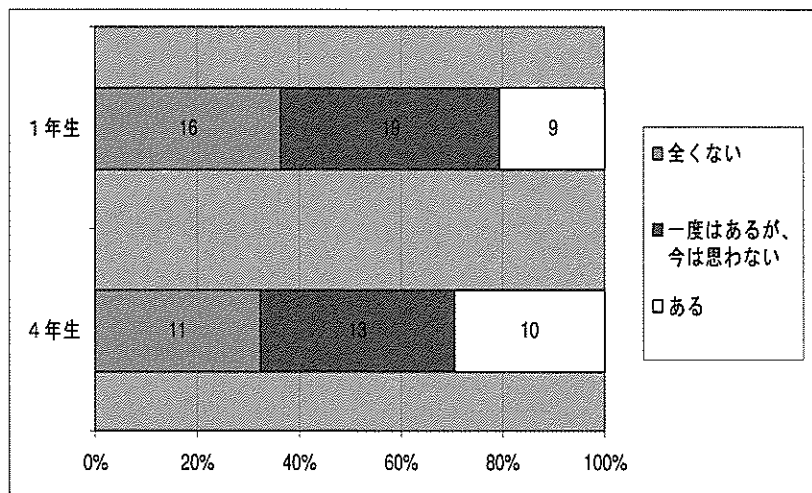
次に高校時代に所属していたクラブ活動と教師志望について見ていきたい。

表2 高校でのクラブ活動所属別から見た教師志望

高校時代での クラブ活動経験の有無		教師志望			
		全くない	一度はある	ある	
1年生	所属	35名	11名	16名	8名
		79.55%	31.42%	45.71%	22.86%
	無所属	9名	5名	3名	1名
		20.45%	55.56%	33.33%	11.11%
4年生	所属	25名	7名	10名	8名
		73.53%	28.00%	40.00%	32.00%
	無所属	9名	4名	3名	2名
		26.47%	44.44%	33.33%	22.22%

表2の通り、7～8割ほどの学生がクラブ活動に参加していた。アンケート調査後のフォローアップ・インタビューでも、高校時代に日本語クラブに所属していた4年生は2人しかいなかった

表1 教師志望の有無について



ものの、2人とも教師志望であった。1年生ではすでに高校時代に日本語クラブに所属していたのは11人で、その内教師に「なりたい」は2人、「一度は思ったことはあるが、今はない」が7人、「一度もない」は2人であった。高校時代のクラブ活動は教師としてのキャリア形成にそれほど影響しないものなのかもしれない。あるいは、高校時代の経験、大学4年間の経験を通じて、志望する気持ちが強まることも考えられる。

3.2 大学のクラブ活動参加への動機

次にクラブ活動に参加する理由についての結果である。各項目について1（全く思わない）から5（強く思う）まで選択してもらった。

表3 クラブ活動に参加する理由について

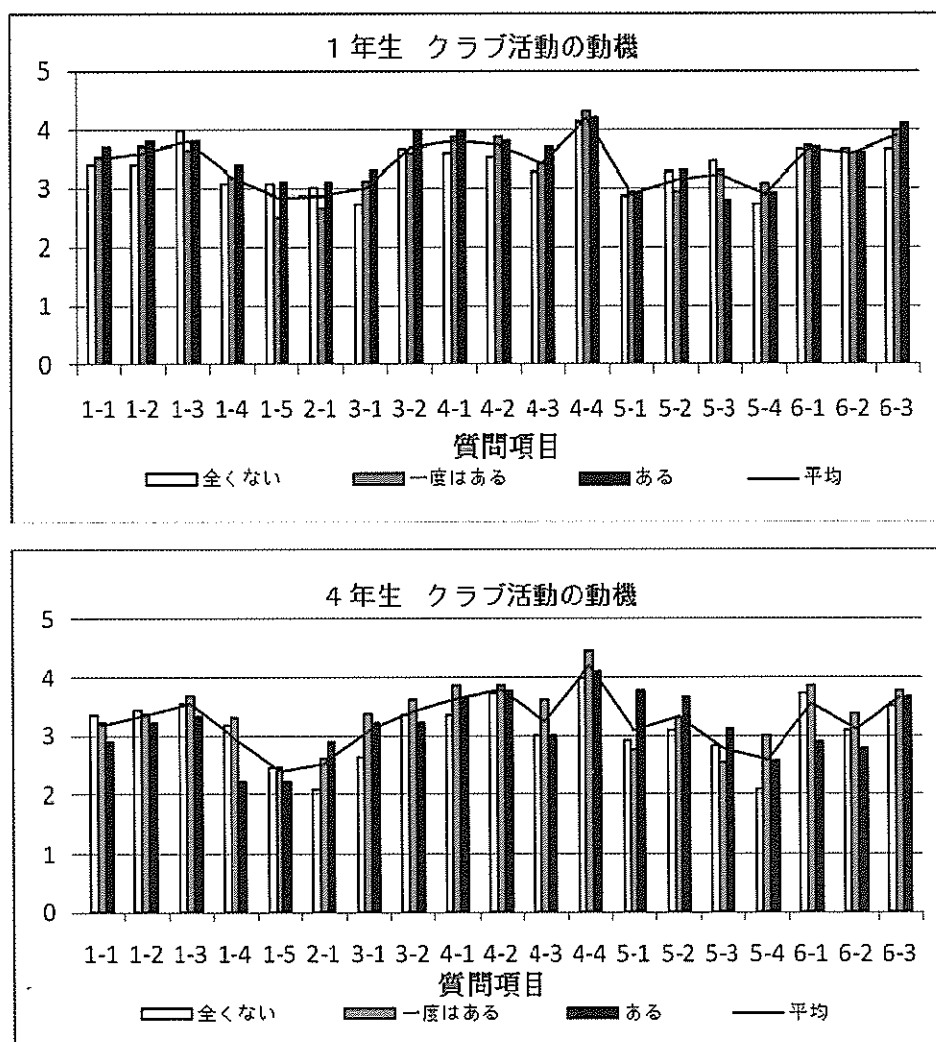
1.キャリア	1-1	自分が将来したいことの最初のステップなので。
	1-2	自分が将来何がしたいかを探ることができるので。
	1-3	自分が将来したいことの専門性を高めてくれるので。
	1-4	仕事につながるネットワークをつくりたいので。
	1-5	卒業時の立派な成績になるので。
2 価値	2-1	自分の気持ちに関わらず、クラブの活動はとても意味のあることなので。
3 自己保護	3-1	クラブの活動することによって、自分の問題が解決できるので。
	3-2	クラブの活動をすれば、さみしくないで。
4 向上心	4-1	クラブの活動することによって、自分もがんばろうと思うから。
	4-2	クラブの活動によって、自分にほこりを持てるので。
	4-3	クラブの活動から、自分の必要性を確かめられるので。
	4-4	クラブの活動を通して、新しい友人をつくることができるので。
5 付き合い	5-1	身近な人が行くように誘ってくれるから。
	5-2	友達がしているから。
	5-3	私が最も知っている人がクラブの活動は重要だと考えているので。
	5-4	私が最も知っている人がクラブの活動に興味を持っているから。
6 学び	6-1	クラブで出会ったいろいろな人から学ぶことができるから。
	6-2	クラブでは先輩から直接日本語を学ぶことができるから。
	6-3	クラブの活動を通して、新しい考え方を学ぶことができるので。

学年と志望者別に関わらず、最も多かった理由は、「4-4 新しい友人をつくることができるので。」であった（表4 参照）。また全体的に、1年生よりも4年生の方がクラブに参加する動機が偏っている。

1年生はほとんど同じような形に沿っているものの、「一度はある」のグループは4の「向上心」に関する質問に対しては平均よりも高い傾向にある（4-1/4-2/4-3/4-4では同グループ平均3.88/3.88/3.41/4.30）。これは4年生の同グループにも見られる（4-1/4-2/4-3/4-4では同グループ平均3.85/3.85/3.62/4.46）。大学生の時に教師志望がない学生またはなくなった学生は、クラブ活動を通して新しいことを学ぶ、または自分を向上させることに強い興味を示していると言えるのではないだろうか。

では「全くない」のグループを見ていくと、1年生では特徴的な部分は見られないが、4年生では、「2-1 クラブ活動は意味があるから。」「5-4 自分が知っている人がクラブ活動に興味を持っているから。」を支持する学生は少ない（ともに同グループ2.09）。これは学年が上がるにつれてクラブ活動自体への興味が薄れていく、あるいはクラブ活動を支持する仲間との付き合いが少なくなっていると読み取れる。

表4 教師志望別クラブ活動の動機



また4年生の教師志望が「ある」学生の平均では、質問4の向上心とともに、他のグループと比べた場合に質問5の「付き合い」の項目が高い(5-1/5-2/5-3では同グループ平均3.78/3.67/3.11)。4年生で教師志望のある学生は教師志望のない学生よりも、周囲の人々に依存する傾向が強いということが分かる。

3.3 教師という職業選択について

ではここで、教師志望が全くない学生(A)と一度はある学生(B)、教師志望がある学生(C)に分け、学年ごとの分析を行ってみたい。ここでも3.2と同様に、5段階で選択してもらった。

AとBの学生に対しての質問は、なぜ教師になりたいと思わないのかについてである。①幼少時代からの無関心②いい教師と出会わなかった③子どもや学生が苦手④教えることが苦手⑤教師は重要な職業ではない⑥子どもや学生との活動は充実感がない⑦教師ではない親の生き方へのあこがれ⑧教師ではない親を乗り越えたい⑨恩師・知人からの教師以外の仕事の勧め⑩友人からの教師以外の仕事の勧め⑪教師の親からの教師以外の仕事の勧め⑫給料が低いという12項目での質問を行った。

一方、Cの学生への質問は、教師志望について①幼少時代からの興味②いい教師との出会い③子どもや学生が好き④教えることが好き⑤教師は重要な仕事だと思う⑥子どもや学生との活動は充実感がある⑦教師の親の生き方へのあこがれ⑧教師の親を乗り越えたい⑨恩師・知人からの勧め⑩友人からの勧め⑪教師の親からの勧め⑫会社で働きたくないという12項目での質問を行った。表5はA Bの学生、表6はCの学生の回答からの平均を表したグラフである。

まずAとBの学生について見ていく。いずれの学生も給与に関しては、ある程度の認識はあるものの、その他の要因も影響しているようだ。Aの学生では特に①「幼少時代からの無関心」や④「人に教えることが苦手」などの内的要因が目立つ。

Cの学生については、②「いい教師との出会い」(平均1年生4.11/4年生4.3)が最も高く、次いで⑤「教師は重要な仕事だと思う」(平均1年生4.11/4年生4.0)、⑥「子どもや学生との活動は充実感がある」(平均1年生3.67/4年生4.1)となっている。また考慮すべきは⑨「恩師・知人からの教師以外の仕事の勧め勧め」と⑩「友人からの教師以外の仕事の勧め勧め」が一定の理由として挙げられていることである。(同グループ平均3.8/3.7)ここからタイ人の大学生にとって教師志望の動機は対人関係から創られやすいと考えることができる。

表 5 教師を志望しない理由

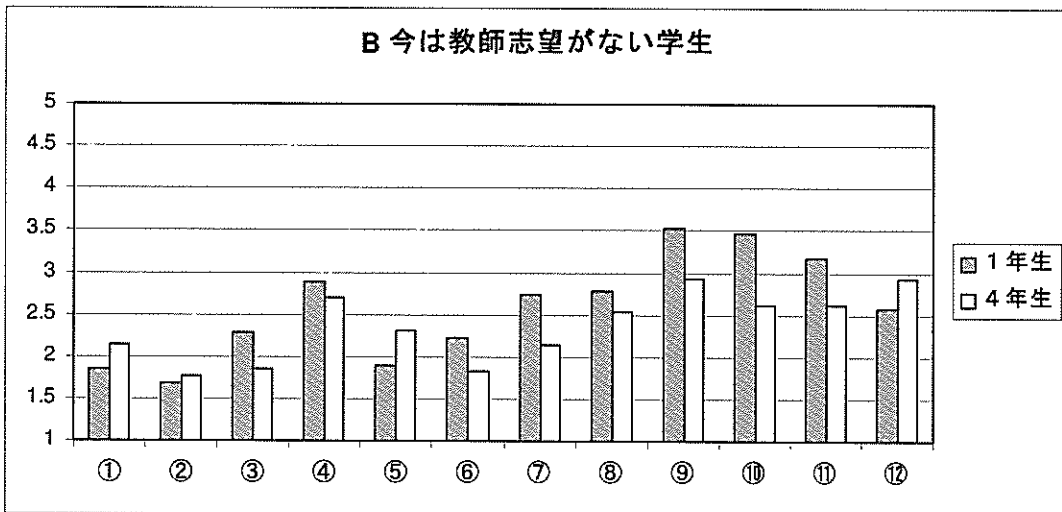
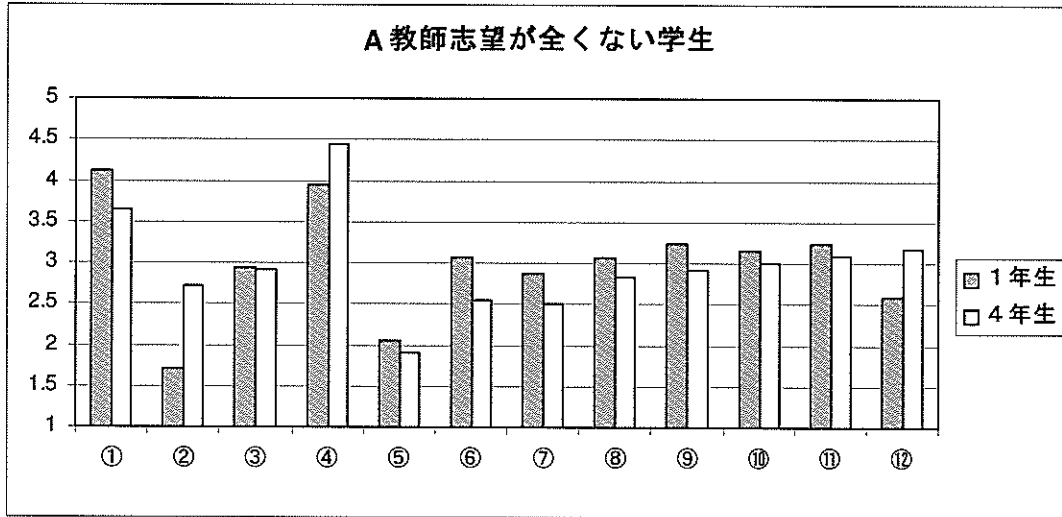
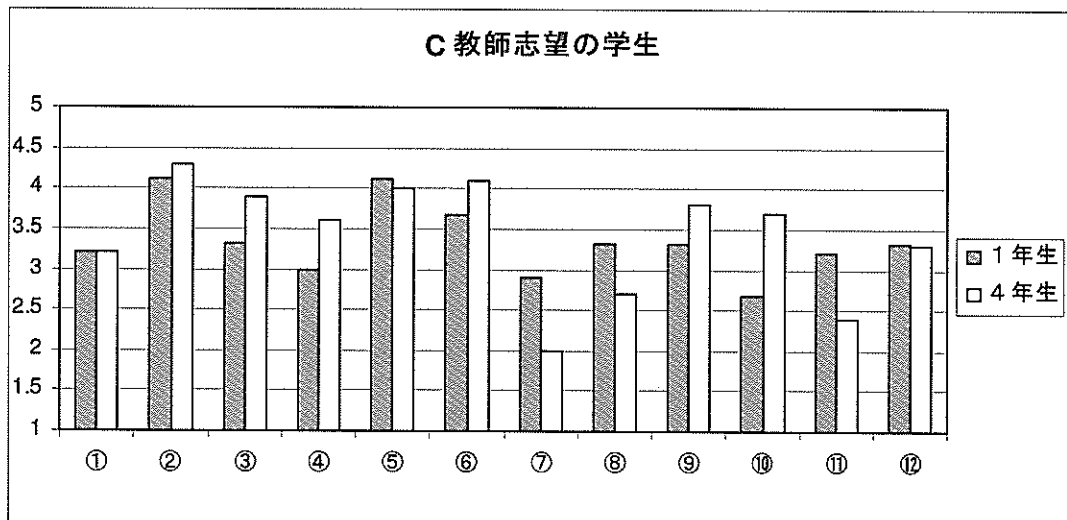


表 6 教師志望の動機



4. おわりに

本論から明らかになったことは、1) 中等教育における教師の量的問題は、待遇だけが原因ではない2) 高校時代での日本語クラブの経験は直接的には、教師への職業選択に影響しない3) 教師志望者の動機には対人関係が影響していることが明らかになった。

職業選択を迫られる4年生の中で、教師を志望している学生は多く、日本語を生かし、考えられる選択としては高校教師である。しかし、現在の中等教育における教師は教員免許が必要とされている。しばらく前まではいくらかの私立高校は直接契約の形をとり、日本語科卒業だけでも雇ってもらうことができたが、年々契約条件は厳しくなっており、日本語科の学生は卒業後に自主的に教員免許を取得しなければならない。その内容は一定期間の教育実習と専門科目の習得であるが、堀内（2000）は「閉鎖制」と理解せざるをえないと懸念している。

例として当校のある日本語科の学生は、日本語クラブでの経験から次第に教師になりたいと思うようになり、私立高校での日本語兼英語教師としての雇用が決定したが、その後、卒業時期が近づいた時に、免許がないとの理由で高校から契約解除を求められた。

現在でのタイ国内の大学で中等教育機関の日本語教員を養成しているところは、コンケン大学教育学部（2004年より）、ブラパー大学（2005年より）のみであり、未だ教員育成機関が足りていない。キングモンクット大学も学部内には技術教育学科があり、高等専門学校や短期大学等の教員育成を行っている。その科では週1回程度、郊外の学校での実習も行われているものの、社会言語学科に教員養成課程はない。

日本語科の併設されている大学における日本語クラブの位置づけをもう少し強め、より充実したものにすることは必要である。また、そこで4年間もの間他学部の学生の指導にあたった学生を奨励するため、教員免許とまではいかずとも、卒業後に高校教師を選択できるような資格を与えられる制度を構築していくことも考えていく必要があるのではないだろうか。

参考文献

国際交流基金「コンケン大学：タイの大学で唯一の日本語教員養成課程」

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2007/report08.html>

藤原正光（2004）『教師志望動機と高校・大学生活－教員採用試験合格者の場合－』文教大学教育学部 第38集 教育学部紀要

堀内孜（2000）『タイ国地域総合大学における現職教育大学院の整備状況と問題点－教育行政専攻大学院に対する実態調査を通じて－』広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第3巻第2号（2000）pp.173-182

松井嘉和、北村武士、ウォーラウト・チラソンパット（1999）『タイにおける日本語教育－その基盤と生成と発展－』綿正社

Jarernvonggrayab, Anu (2008) *College Student Motivation to Participate in Student Activities: Scale Development and Profile Analysis*, in APERA Conference 2008 CONFERENCE PROCEEDING DAY 1: 26 NOVEMBER 2008 Concurrent Session 2

Sheldon Shaeffer *Thoughts on Good Teachers and Good Teaching: 40 Years Later*

<http://www.unescobkk.org/fileadmin/user_upload/apeid/Conference/12thConference/paper/Sheldon_Shaeffer.pdf>

